

航空

「同期の桜」に思う

——海軍甲種飛行予科練習生——

高知県 多田耕三

私は「若い血潮の予科練の、七つ釘は桜と錨……」と歌われた旧海軍飛行予科練習生の甲種飛行予科練習生、所謂「予科練」といわれた飛行兵に憧れ、旧制中学校より志願をして松山航空隊に入隊した戦前派の一員であります。

甲種予科練習生の歴史は昭和十二年に遡ると聞いていました。昭和十四年三月、予科練は横須賀航空隊から霞ヶ浦空へ移され、さらに昭和十五年十一月、土浦

空へ移ったのですが、その土浦航空隊は昭和十五年十一月十五日開隊と書かれていますから、土浦空（霞ヶ浦に面した茨城県土浦市）開隊と同時に、我が予科練の先輩は土浦で教育訓練を受けられたわけです。

私が入隊した松山航空隊は昭和十八年十月一日開隊し、昭和二十年七月十五日に廃止と言われていますから、大東亜戦争の彼我の戦況は日本軍にとって極めて悲惨な状況へと追い込まれていった歴史と運命を共にしたといってもよいでしょう。私はそのような時期に、単に七つ釘に憧れただけでなく、自分の青春をこの戦に、海軍航空隊にかけての志願入隊でもありました。

予科練甲種、いわゆる甲飛には、昭和十七年は二三〇〇人、同十八年には十倍以上の三〇九〇二人、同十九年の採用計画員数は七六五〇〇人、さらに同二十年

になると採用計画員二四六〇〇人と公的記録にありません。そのように、我々の世代の少年は生命を賭しても予科練に志願、あるいは入隊したことをこの数字が示しています。

従って、予科練習生の教育を担当した航空隊は、昭和十九年には、福岡、滋賀、三沢、清水、小松、小富士、倉敷、浦戸と多くなり、昭和二十年には、奈良、高野山、西宮、宝塚、宇和島が開隊し、総数は十八航空隊となったといえます。この十八個所の航空隊では、次に申す私の体験と同じような熾烈な訓練の毎日でありました。

私は冒頭に「戦いとは大事なものの為に闘うものにて候」と申し上げます。まさに、私達は大事なものの、日本国、父母兄弟、家族や、これら最愛の家族を養い育ててくれた郷土を守るために闘い、多くの先輩、戦友を失ったことを肝に銘じて今日まで生きてきたのであります。

松山航空隊入隊後「飛練」と呼ばれる飛行練習生を経て、高知航空隊に配属、そして終戦という経歴を持

つ私であります。十七歳〜十九歳という多感な青春時代を、私なりにイメージしますと、次のようなことがいまだに頭に浮かんできます。

棒倒し・騎馬戦・モールス符号・手旗信号・天体観察・六分儀・海軍精神注入棒（俗にバットという）・野外練習・実弾射撃・うさぎ狩り・カッター訓練（漕艇）・白い作業服・「白菊」訓練用飛行機（俗に「赤トンボ」といわれた）・特別攻撃隊志願の血判・旧海軍の戦艦「大和」を呉軍港で見たとときの大砲の大きさに驚いたこと・零戦のすばらしかったこと・軍歌練習・乾パン・日曜日のぜんざいの甘かったこと・ホームシック・休暇・外出・海軍のクラブ・暗号書・機械体操・航法訓練などが次から次へと目に浮かんでくるものです。

その他、総員起床〜課業始め〜巡検〜消燈〜就寝という日課が脳裏をよぎったり、五十余年経過した今思い返してみても、「我が青春に悔いなし」という感じに偽りはありません。

これらの数年間は、規律に縛られた表に厳しい毎日

ではありましたが、皆同じ年頃の仲間に囲まれ、互いに血判を捺して特攻隊に志願し、死を誓いあった仲でした。親よりも強い絆というか、強い連帯感を持った親友ばかりであったのであります。従って現在でも、生き残った「甲飛の同志の会」を、毎年、五、六回は定期的に開催しています。

「サイレント・ネイビー」のもとに、身を賭して祖国のために黙々と戦い、黙々と南海の大海原、真っ青な大空に散華していった人々が沢山いるのであります。後に続くということを信じ、誓って、なんの疑いもなく喜んで愛する祖国日本のために「我が身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあり」と、当時の難局に死んでいった先輩たちがいる。このことを今思い出すだけで胸が痛くなるのです。

私達は、西条八十作詞の『同期の桜』を、生き方、死にざまと心に銘じて日々を過ごしてまいりました。

一 貴様と俺とは同期の桜 同航航空隊の庭に咲く
咲いた花なら散るのは覚悟

みごと散りましょ 国のため

最近でも、スナックなどで、一般の人々が歌っているのをよく見かけます。しかし、私達予科練にいった者が歌うのは、今の人達が歌うのより、少し長く引張った、いわば「哀唱」であります。戦友たちが血判まで押して特攻志願をなし、互いに死を誓い合った者の詩なのです。涙が出てきて仕方なくても、最後まで哀感を込めて歌うのです。

終戦の年の七月頃、すでに第一戦闘基地になっていた我が高知航空隊に、実戦部隊から零戦、紫電改、銀河など約三十余の飛行機が飛来してきました。私達も、戦局の重大さ、南洋諸島や、既に沖繩も六月下旬玉砕ということから、危機感というものをひしひしと身に感じていた頃なので、「何かあるだろう」と、仲間同士で密かに話し合っていました。

その日の夕食を、神風特別攻撃隊の皆さんとご一緒させていただくことになりました。ところが、意外に感じることは、明日、死に赴く人とは見えなくらい、みんな明るいのであります。

この特攻隊の隊員、先輩たちは、確実に明日死ぬと

分かっていながら、彼らの従容とした死に対する姿勢に、崇高さを感じたのは私だけでなく、列席した友人たち皆の胸にこの姿が焼き付いていたのであります。

今の人、特に同年輩の人達にとつては異常な体験、誇張した話とも見られるかもしれませんが、その当時は「死」は当然の結末と考えられていたことであり、私達皆が、死に真正面から対処すべき方法を模索していたからかもしれません。その頃は、生きるための教育よりも、いかに死ぬべきかを教わっていたようにも思えるのであります。

あの頃の私達は眼前にある「死」と直面していることを実感していたし、いつかは我が身であり、それが早いか遅いか、意義ある死とは……と模索している日々でもあったように思います。

しかし、あの時、現実には死に直面している特攻隊員の明るさ、清々しさというか、その崇高さに接し、私たちが送る身の方が沈みがちでありました。

この送別会の会食は、その頃には珍しかった肉やお寿司、果実や菓子など、最後の心尽くしの食事が出さ

れていましたが、当時としては貴重な品々を、私たちに勤めてくださった特攻隊、戦闘機乗りの人々。そんな美味な食事も、私たちにとつては少々喉に通り難く、また眠れぬ夜を過ごしたのであります。

翌朝午前四時、夜のまだ明けやらぬ薄明かりの早朝。私たち基地航空隊員は、飛行場の周りに整列して、特攻隊員を見送りました。

全員「帽振れ」の合図に合わせ、軍帽がちぎれるほどに振る。朝焼けの、淡いオレンジ色に染まった空に向かって、若者を乗せた神風特別攻撃隊は飛び立って行きました。その日もまた、南の空で、南の海で、散っていったであろう先輩たちを、私は決して、決して忘れない。

『同期の桜』

二 貴様と俺とは同期の桜 同じ航空隊の庭に咲く
血肉分けたる仲ではないが

何故か気が合うて別れられぬ

あの特攻隊出撃の姿を見送ったことを思い出しなが

ら、「戦後五十年余経ったいまなお、戦時中の暗い陰をひきずっている」と言う者もあるかも知れぬが、このような思いを持ち続けている仲間も随分多いことと
思います。

その反面、「サイレント・ネービー」のモットーや、「スマートで、目先が利いて几帳面」という海軍の伝統。また、戦争中も士官連中は長髪であったようなりべラるな海軍などを、私は今でも思い出します。

そのようなことを思い出すにつけて、今の若い人たちよ、願わくば、『同期の桜』を、今調に、朗らかに、しかも早いテンポで歌って欲しくないのです。私たちは、前にも申しした通り、哀感を込めて、詩の一言一句に「従容として死地に赴いていった」若い特攻隊員一人ひとりの顔を思い浮かべながら、じつくりと歌いたたいのであります。

あの、神風特攻隊員達は、零戦の風防を開けて、真っ白いマフラーを風になびかせながら、見送る我々に、最後の敬礼をし、手袋を振って、飛び立った銀翼の日の丸。南海の群青の大海原に、南の紺碧の大空に消え

て行った若い命。それを思うにつけ、哀感を込めながら、その人達を思いながら、じつくりと歌いたいと私は言いたいのであります。

その人達が、命を賭して守りたかった祖国日本です。あとに続くことを信じ散華していった特攻隊員の信頼に応えることなく、終戦を迎えてしまった私たちであります。彼らが守りたかった父母や兄弟、そして祖国日本や懐かしの郷里を、私たち生き残り組は、先輩の遺志を継ぐ責任を背負って、戦後日本のために、それぞれの自己を犠牲にして死に物狂いで頑張ったつもりです。

その結果、現在の日本を築き、死んだ人達が望んでいたと思われるような、豊かで平和な、みんなが幸せで恵まれた国を造り上げたと思う。しかし、同時に、物質的には恵まれているようですが、精神的にはどうなっているのだろうか、脆弱な社会体質、これが「現代の姿だ」と批判する者も多いようです。

今こそ、「サイレント・ネービー」の時代の体験や、熱い思いを静かに語る時代がきたような気がします。

「いつまでもサイレントではなく、戦争を知らない子供たちに、体験の真実を伝える責任が私たち戦前派にあるのではないだろうか」と思われます。

「日の丸」は、私にとっては、一部の人が言う「侵略の象徴」などではなく、神風特別攻撃隊の零戦の銀翼・真っ白いマフラー・戦闘機乗りの若い顔、朝焼けの空・白い軍服などがオーバーラップする神聖なものであり、また『同期の桜』の郷愁へと結び付くものでもあります。

その歌詞「三」には、

三 貴様と俺とは 同期の桜 離れ離れに散ろうとも

花の都の靖国神社 同じ梢に咲いて会おうよ
私は再度言いたいです。この詩を歌うときには、いさぎよく死に臨んだ若い飛行機乗りの心情や思いを込めて、やさしく、しみりと歌って欲しい。そのように歌うと、テンポの早い今までは全く異なった歌になるでしょう。

戦争を知らない今の世代の人達も、この歌に心打た

れるものがあるのは、若くして散っていった飛行機乗りの、若くして死ぬことの無念さや、自己に対する哀れさなどを、万感を込めて、大らかな愛・自己犠牲・愛国心を歌った詩だからでありましょう。

また、その人達は、貴方たちの父であり、祖父であり、叔父さんであり、友達のお父さんであるかもしれない。現在の幸せな貴方には、その人達の犠牲と貢献のうえに存在していることも、決して忘れないで欲しいと思うのであります。

と同時に、集大成としての祖国日本の「象徴」としての「日の丸」の尊厳のために若い命を賭した人達のことや忘れないで頂きたい。この私のささやかな体験談を通して、外国では国旗を大切に、国の名譽の象徴は「国旗」であるとしており、「国旗のもとに死ぬ」という精神は諸外国には厳然として存在しているということを確認して頂きたい。